

海の自然体験に関する小学生保護者への質問紙調査

0714020 小林遼太 (海洋スポーツ・健康科学研究室)

I. はじめに

都市化の進行、情報社会の進展は、我々人間と自然との隔たりを益々拡大させてきている。この隔たりに橋渡しをし、両者が共存することへと導く先導役は、子どもたちにとって最も身近な存在である保護者であると述べられている(藤田, 2002)¹⁾。そこで、海での自然体験に焦点をあて、小学生の保護者がどのような体験をしてきており、子どもたちにそれらがどのように影響を与えているのか、また保護者自身の意識にも関係があるのかどうか検討した。

II. 研究の方法

神奈川県鎌倉市の「NPO 地球の楽校」、東京都多摩市少年野球チーム、岩手県宮古市の4つの小学校等に所属する小学生の保護者を対象に質問紙調査を行い、158部を回収した。質問紙は、保護者の小学生時代における海での自然体験程度に関する質問および小学生の海での自然体験程度、海での自然体験に対する期待、イメージ、阻害要因などに関する設問から構成した。

III. 結果・考察

海の自然体験15項目の体験の程度に関して3段階尺度で選択してもらい、それぞれに5点、3点、1点と得点を与え、その合計値により自然体験の多い群(以下H群)、中程度の群(以下M群)、体験の少ない群(以下L群)に分類した。小学生についても同様に3つの群に分類した。

海の自然体験の必要性を保護者に質問したところ、H群が最も「ぜひ必要」と回答した割合が高かった。しかし、「どちらかといえば必要」との回答も含めて考えると、体験の多少に関わらず必要性を感じている割合が90%以上を示し、大部分の親は海の自然体験が小学生に必要であると考えていると推測できる。保護者と小学生の3群についてクロス集計を行ったところ、保護者のH群では小学生のH群も多く、小学生のL群は少ないという結果が得られた。また、保護者がM群の場合、小学生のL群は少ないという結果が得られた。これより保護者の自然体験の程度は小学生の体験の程度に影響を及ぼすと考えられる。

海の自然体験の阻害要因に関して質問したところ「適当な指導者や教えあう年上の子がいない」「遊べる海が近くにない」「子どもにも親にも時間的ゆとりがない」の3項目で「あてはまる」との回答が約60%であった。

IV. おわりに

本研究の結果から、保護者の海での自然体験が、子供にも影響を及ぼすと考えられた。自然体験の必要性は認識されているにも関わらず、なかなか現実には海に出かけることができない現状があることが推察された。

主な参考文献

- 1) 藤田静作「自然体験に関する保護者の実態と意識」秋田大学教育文化学部研究紀要, 教育科学部門 57, pp. 55~65, 2002